伝説の
Legendary technology
テクノロジー
52

盆栽作家 小林國雄さん

1本の木で命の尊厳を表現

28歳で盆栽の世界に入り、2002年には私財10億円を投じて
「春花園BONSAI美術館」をつくった小林國雄さん。
世界中に知られる盆栽の巨匠が「40年やってようやく盆栽の本当の魅力に気がついた」と言う。
鉢に植えた1本の木で表現する盆栽の美は、奥が深い。

海外からも弟子入り志願者が

東京都江戸川区の住宅街にある春花園ＢＯＮＳＡＩ美術館には、観光バスも停まれる駐車場がある。土日には観光バスに乗った団体客を中心に300人前後が訪れる。年間約２万人を数える入場客のおよそ７割が、外国人だ。

「外国人向けのインターネットサイトでは、東京に行ったらぜひ訪れたい観光スポットとして、この美術館が５番目に紹介されているそうです」と穏やかな表情で小林國雄さんが言う。

美術館に来るのは観光客だけではない。海外のマスコミも取材にやってくる。テーブルの上で新聞や雑誌の記事を広げながら「これはどこの国だったかな」と小林さん。見ると英語以外の文字が並んでいる。英語

こばやし・くにお　1948年、東京生まれ。都立農産高校卒業後、父親が経営していた園芸農家を手伝っていたが、28歳のときに盆栽の世界へ。独学で修業を積み、国風展、作風展など盆栽の有名な品評会で賞を総なめにしてきた。盆栽と縁の深い水石も学び日本水石協会理事長の肩書も持つ。趣味は庭いじりとカラオケ。

圏に限らず、ヨーロッパやアジア、南米などのマスコミも来るのだと言う。

今や盆栽はＢＯＮＳＡＩとして世界各国で通用する言葉になっている。2002年にこの美術館を開いたのも、こうしたグローバル化の時代が必ず来ると感じたからだ。今はベトナムやインドネシアなど東南アジアでＢＯＮＳＡＩがブームになっていると言う。

約800坪もある美術館の敷地内には、およそ1000本の盆栽が展示されている。なかには１億円の値がつく盆栽もある。芸能人の格付けをするテレビ番組で、１億円の盆栽として紹介されたのも、小林さんの作品だ。盆栽界で最高の栄誉とされる国風賞を受賞すること16回。日本盆栽作風展でも事実上日本一の内閣総理大臣賞を４回受賞している。

まさに盆栽界の巨匠であり、その名声は海外にまでとどろいている。これまでに講演やデモンストレーションなどのために訪問した国は32カ国。そんな小林さんに憧れて、海外からも弟子入り志願者が来る。これまで育てた海外の盆栽職人は約100人。取材当時７人いる弟子のうち、１人はポーランド人、２人は中国人だ。

1日15時間、盆栽と関わる

もともとは園芸農家の実家を継いで、サツキなどの植物を栽培していた。しかしどこか飽き足りないものを感じていた28歳のとき、衝撃の出会いをした。

「たまたま見に行った盆栽展で『奥の巨匠』という作品に強い衝撃を受けました。枝や幹の多くが枯れて白くなり、皮だけで生きているような五葉松の盆栽でした。樹齢は500年から600年くらいだと思いますが、骨がむき出しになったような状態だったんです。なぜこんな状態になっても生きているのだろうと不思議に思い、そこに命の尊厳を感じて、自分もこんな盆栽をつくりたいと思ったのです」

そこから一気に盆栽にのめりこんだ。ただ、誰かの弟子になるようなことはしなかった。すべて独学である。盆栽展などに行き、作家が盆栽をつくっているところなどを見ては、その技を盗むようにして身に付けていった。

朝の４時半に起き、１日15時間、盆栽と関わる毎日を今まで40年間

ずっと続けている。
「夢も、盆栽の夢しか見ません」
　失敗もたくさんしてきた。
「お恥ずかしい話ですが、ざっと１億円分くらいは枯らしているでしょう。だからこそ、今の成功があるんです」としみじみと語る。
　ＢＯＮＳＡＩ美術館の一角には、盆栽の墓がある。枯らしてしまった盆栽を供養するためだ。年に１回は、僧を招いての法要も行っている。
　盆栽は1300年ほど前、中国で生まれた。日本に伝わってきたのは800年ほど前というから、鎌倉時代のことだ。その後、室町時代に今の形が確立されたという。

日本の盆栽は引き算の美

「中国では盆景と言って、盆栽の横にミニチュアの家や動物の像を置いたりします。ちょっとガーデニング的なところがありますね。中国の盆栽は全体に大きく、華美華飾の趣があります。それに対して日本の盆栽は、和歌や俳句のような凝縮した美を求めます。油絵やガーデニングが足し算の美なら、日本の盆栽は引き算の美。侘び寂びの世界に通じるものがあります」
　と語る小林さんによれば、どんな木でも盆栽にすることはできる。けれども盆栽は、背丈数十センチのものを数十メートルの巨木であるかのように見せるのが醍醐味。だから葉の大きなものは盆栽に適さない。
　畑で苗木から育てるときには、木が大きく育ちすぎないように、土の中に瓦を置いてその上に植える。そうすると真下に伸びる直根の成長が止まり、横根が八方に広がるようになる。盆栽として鉢で育てるときには直根は切ってしまう。
「盆栽にとって大事なのはまず根張り。足元がきれいだと全体が美しくなります。八方根張りはとても大事な要素です」
　盆栽にする木の種類は、大きく分けると、松、真柏、雑木、そして実もの・花ものに分類することができる。松では黒松、赤松、五葉松が主役だ。
「松は樹齢が長いし、盆栽の中では特別な存在でしょう」

数々の海外メディアで紹介された掲載紙。記事の扱いの大きさから、海外においてのＢＯＮＳＡＩへの関心の高さがうかがえる。

内面的な美しさを引き出したい

　小さな木を大きく見せることを、形小相大と言う。そのためには「線

と空間が大事」だと小林さんは言う。

針金を枝に巻き付け曲げ込みながら整形していく。その線を引き立てるには、空間を生かすことが重要だと巨匠は説く。

小さな枝や葉は鋏で切る。10年先、20年先の姿を思い浮かべ、どちらの方向に枝が伸びていけば美しいかを考えて鋏を入れていく。

鋏にはたくさんの種類がある。用途によって使い分けるのだが、小林さんは片手に４丁の鋏を同時に持って、作業することができる。

「人のできないことをできるのがプロ。私は鋏を持ったまま針金をかけることもできます」

と話す小林さんのそばにいた弟子がこう言う。

「弟子入りしたとき真似しようと思い練習しましたが、全然できませんでした」

もっとも小林さん自身は、鋏を４丁も持つのは「若いときに自分を売り込むためにやったこと」と、やや自嘲気味に語る。

「若いときはせっかちで、早く仕上げたかったし早く名前も売りたかった。だからつい手を加えすぎて木を枯らすことも多かったものです」

つくり続けて40年。齢70を超えた今になって作風が大きく変化したと言う。

「最初の頃は賞を取れるもの、高く売れるものをつくろうと考えていました。でも、今は金も名誉も追わずに、自分の好きな盆栽をつくろうと思うようになりました。もののあわれ、朽ち果てていく道行の途中にあるような命を感じさせる盆栽が好きなんです。そして品格と存在感。造形的にきれいなだけではなく、内面的な美しさを引き出したいというのが今のモチベーションになっています」

これから一番したいことは――。そう質問すると、即座にこんな答えが返ってきた。

「人を育てることですね。仕事に対しては厳しいですよ。外国人も含めて弟子は全員、寮生活。朝は６時起床です。大事なのは素直さと情熱。一所懸命努力すれば一流にはなれます。でもそれだけではトップにはなれない。そこは持って生まれた美意識や素質がないとね」

美術館で開いている盆栽教室は素人向け。これからはプロを育てるための教室を開くことも考えている。

盆栽づくりと人づくり。小林さんの二刀流人生はまだまだ続く。

「仕事は早くてきれいじゃないとプロではない」と小林さんは言う。鋏を3丁とペンチを持ち、鋏で枝葉を揃えペンチで針金をかける。